

【地域活性化研究】

岡崎市内の里山を活性化させる子どもの遊び環境について

岡崎女子大学 子ども教育学部 山下 晋

要 旨

岡崎市内には、子どもの遊び場となり得る里山は多く存在するが、人的・金銭的な理由で活用できていないのが現状である。そこで本研究では、岡崎大学懇話会より助成を受け、本学と額田地域の団体・ボランティアとが協働して、里山を継続的に活用・活性化することを目的に、自然を活用した屋外遊びを実施した。その結果、子どもたちは自然遊びに夢中になり保護者からも肯定的な評価を得たことから、密な産学官連携が組み、堅実な企画・運営をすることで、持続可能な「里山を活性化させる子どもの遊び環境」を作られることが示された。

1. はじめに

岡崎女子短期大学は半世紀以上にわたり、多くの幼稚園教諭・保育士（以下：保育者）を養成し、県内外に輩出してきた。短大設立となる源流はさらに半世紀遡り、大正13年の嫩幼稚園の創設にあたり今年100周年となる。また、平成15年に岡崎女子大学が開学、平成29年度に文部科学省より私立大学研究ブランディング事業の選定を受け、「子ども好適空間」に関する調査・研究結果を広く地域に還元したり、卒業した学生が保育者となった際、屋外において子ども好適空間を構築することができることを目指した授業科目「子ども好適空間演習」を設置し、実践的指導能力の向上をめざす教育活動に生かしている。

筆者は体力・運動能力向上の観点から屋外の遊び環境のあり方を検討するために、冒険遊び場（プレイパーク）などの遊戯施設を視察して得た知見を活かし、大学内の広場やグラウンドに遊び場を設営し、子どもたちの遊ぶ姿やアンケート調査から実践的検証を行ってきた。^{1) 2) 3) 4)}

また、令和3年度からは、岡崎市内の愛知県野外教育センター（千万町町）や絆の森（石原町）の里山の自然を活用した遊び環境を設定し、ネットクライミングやロープ渡りなどのアスレチック遊びや、雨樋でコースを作りどんぐりを転がす遊び、木の実や葉っぱなどを使った木工作で遊ぶ子どもの様子から、子どもを魅了し、主体的・積極的に遊ぶ空間には、「挑戦」「非日常」「新規性」「工夫」などの要素が含まれていることが明らかになってきた。^{5) 6) 7)}

さらに、これらの取り組みを通して、額田地域の豊かな自然環境に森林に触れ、解放感や心地よさという心的要因のみならず、自然ゆえの自由度や応用性の広さなど素晴らしさを再認識する機会となり、子どもだけではなく大人も魅了し、存在感を再認識させることで地域活性化にもつながることを示唆してきた。

これらの点から、里山を利用した子どもの遊び環境を作るという取り組みが単発的な活動で終わるのではなく、継続できるように努めなければならないと考える。活動継続を実現するためには、はしごやノコギリなどの工具や、ロープやネット、丸太などの遊具となる器材の最低限度の物的資源の整備と保管、さらには器材の作成や、それらを使って安全に遊び場を作ったり、子どもと一緒に遊ぶことができる人的資源の確保が課題となっている。その他、活動場所となる森林を所有する地権者の了解と協力、取り組みを周知する効果的な情報発信など、地元企業や団体、本学、岡崎市が共同した「産学官連携」が必要であると考えられた。

そこで、本研究は、里山の自然環境を使った屋外遊びを実施し、里山が活性化する遊び環境

のあり方を検討することに加え、本活動が継続する方法 (SDGs) を検討することを目的とした。

2. 方法

(1) 屋外遊びの実践

自然を活用した遊びは2回実施し、その準備や内容について次にまとめた。

a) 「わくわく体験 森の遊び場」

令和5年9月17日(日)、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学と愛知県野外教育センター(以下:センター)^[注①]の共催事業として行った。本活動は岡崎女子短期大学の授業の一環でもあり、4名の教員と5名の学生が参加した。9月16日(土)の午後から教員と学生が中心となりセンターの職員の方と共に、倒木が放置され笹が生い茂るセンター敷地内にある林の中に、スラックラインやネットを張るなどしてアスレチック環境の設営を行った。また、センターの職員の方に、子どもたちが安全に活動できるよう遊び場の足元の笹を刈っていただいたり、マスつかみの準備(マスの調達、つかみ取りをする川の準備、串の準備、炭火起こしなど)を行っていただいた。また、「森の工作工房」と称して、木の実や葉っぱなど自然物を材料に造形物を制作する炊事場横の6~8人用テーブル・長椅子4セットの上2箇所、雨天を想定したブルーシートの屋根(5m×7m)を張った。当日の活動内容は表1の通りである。

表1 「わくわく体験 森の遊び場」の活動内容(9/17)

10:00	<ul style="list-style-type: none"> ○はじめの会 ○わくわく体験 森の遊び場 ①森のアスレチックパーク ネットクライミング、ターザンロープ、綱渡り、丸太のブランコ、はしご登り、ハンモックなど、ダイナミックに体を動かして遊ぶ。 ②コロコロどんぐりサーキット 雨樋と木製ブロックを組み合わせてコースを作り、どんぐりなどの木の実を転がして遊ぶ。 ③森の工作工房 木の実や葉っぱなど自然物を材料に、紙皿や油性マジック、木工用ボンドなどを使用して制作する。 ④輪投げ遊び
12:00	<ul style="list-style-type: none"> ○昼食(マスつかみ/マスの塩焼き)
14:30	<ul style="list-style-type: none"> ○終わりの会、後片付け

b) 「絆の森自然体験案内『ワクワク★ドキドキの自然遊び』」

令和5年11月5日(日)、里山こうぼうをつくる会の「親子自然体験案内」事業の一環で、岡崎市石原町にある絆の森で行った。本事業は石原林道協議会「里山こうぼうをつくる会」が主催し、愛知県から助成^[注②]を受けて実施しているものである。令和5年度は、里山・里川の保全・維持・管理だけでなく自然資源の利活動として、自然観察、自転車体験、絆の森と生き物・樹木をテーマに講座を実施しており、筆者は「木育・木づかい」の講師として参加した。

里山こうぼうをつくる会との事前の打ち合わせにおいて、絆の森に流れる小川を渡るための丸太(約2~3m、直径30~40cm、6本)の調達、足元に生えている笹などの刈り取り、土手滑りをするための斜面の整地を依頼し、前日までに準備をしていただいた。

11月4日(土)午後から、絆の森敷地内で教員と学生が遊びの環境を準備した。特に今回は教員と学生で作成したロープネット(3m×2m)や野球の防球ネット(4m×4m)を組み合わせるこ

とで、子どもたちの好奇心を掻き立てるようなアスレチック環境を作ることに努めた。また、石原農村公園内の弓道場の射場となる母屋を利用し、木工作のために机を並べ、材料や用具の準備を行った。当日の活動内容は表2の通りである。なお当日は、教員や学生のほかに、地元の方7名、岡崎ローターアクトクラブ（以下：岡崎RAC）^{〔注③〕}の青年4名に、子どもたちのアスレチック遊びや木工作の補助や会場整備・昼食の準備、後片付け等に参加していただいた。

表2 「ワクワク体験★森の遊び場」の活動内容（11/5）

8:30	○開会式
9:00	○ワクワクの★ドキドキ自然遊び
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>①アスレチック遊び ネットクライミング、ターザンロープ、はしごのブランコ、はしご登り、ハンモック、川を渡る綱渡り、丸太橋、土嚢袋に乗って土手滑りなど、ダイナミックに体を動かして遊ぶ。その他、いろいろな輪投げ遊びをしたり、雨樋と木製ブロック使ってコースを作り、どんぐりなどの木の実を転がして遊ぶ。</p> <p>②木工制作 木の実や葉っぱなど自然物を材料に、油性マジックや木工用ボンドなど使用してキーホルダーなどを制作する。</p> </div>
12:10	・昼食（最強汁づくり、～13:00） ^{〔注④〕}
14:00	○終わりの会、後片付け

(2) 活動後の振り返り及び関係者へのインタビュー

令和5年は、質問項目に対するアンケートは行わず、自由記述形式にて参加者からの振り返りのコメントを郵送やwebにより行った。また、「ワクワク体験 森の遊び場」の共同主催者であるセンター職員（唐澤氏）、「絆の森自然体験案内」の企画者である里山こうぼうをつくる会会長（梅村氏）とボランティアスタッフの岡崎ローターアクトクラブ会長（遠藤氏）対して、活動に対する振り返りや今後活動を発展させる方法について意見を伺った。

なお、活動写真やいただいたコメント・意見については、本報告書を含む公の雑誌等への掲載、口頭発表することを事前に伝え同意を得た。

3. 結果

(1) 「ワクワク体験 森の遊び場」について

当日は、16組家族が参加し、親などの保護者25名、子ども23名（就学前児童12名、小学生11名）であった。午前10時からはじめの会（開会式）を行った後、参加者は自由に活動を行った（図1）。

高さ3mまで張られたネットを登ったり、小さな川の対岸に渡ることができるように張られたロープを渡るなど、夢中になって遊んでいた。芝生広場に設置されたさまざまな距離や高さに挑戦できる輪投げや的当てに、親子で何度も挑戦している姿や、雨樋や木のブロックを組み合わせてコースを作り、木の実を転がして遊ぶ姿が見られた。工作コーナーでは、松ぼっくりや栗、杉の実、木の皮や紅葉の葉などを組み合わせて紙皿に貼り、壁飾りなどの制作を行った。

11時30分に午前の部を終了し、小川でマスを掴み、はらわたを取り出して、塩焼きにするプログラムをセンターの職員を中心に、学生もサポートしながら行った。昼食時に突然激しい雨が30分間降ったが、急遽、教員が用意したブルーシートや屋根の下に参加者を誘導し、工作などの活動を継続させたり、雨水遊びを行うなど臨機応変に対応することができた。

昼食後は雨がやみ、子どもたちは午前中とは異なる環境で、自然を満喫しながら、普段できない遊びに夢中になって遊んでいた。参加した学生は、森の中に遊び場所などを自ら設営することに楽しさを覚えると同時に、自然が豊かであることの素晴らしさを再認識していた。また、子



図1 「わくわく体験 森の遊び場」当日の様子

- 1 段目 (左) 始めの会で学生が挨拶をする様子 (右) 輪を投げて、棒を倒す遊びをする様子
- 2 段目 (左) ネットクライミングをする様子 (右) 綱渡りをする様子
- 3 段目 (左) 親子で制作活動をする様子 (右) 自然物を活用した作品
- 4 段目 (左) 雨樋でコースを作り、どんぐりを転がす様子 (右) 捕まえたニジマスを塩焼きにする様子

子どもが夢中になる遊びは多岐にわたること、子どもが「少し難しい」「試行錯誤すればできそう！」と思えることが「楽しい」に繋がるのではないかと気づくことができた。子どもたちの遊びを見た保護者からは、多くの肯定的な感想が寄せられており（表3）、今活動は、我々が目指す「屋外における子ども好適空間」にとなっていたことが示された。

表3 「わくわく体験 森の遊び場」参加者の感想^{〔注 5〕}

- ・色々な遊びが用意されていて、大きい子から小さい子まで楽しめてよかった。
- ・自然の中にあるアスレチックという特別感にも満足していた。あるものをうまく使って、環境が作られていたことが楽しかった。
- ・なかなか森で遊ぶということができないので、非日常を感じたし、さまざまな年齢の子どもと触れ合い、考えながら一緒になって遊ぶことができ、よい刺激になった。
- ・先生方や学生さんも子どもの行動に目を向けた確かなアドバイスをしてくれて、子どもが考えた遊びと一緒に楽しんでくれて良かった。
- ・大変な準備であり、片付け手伝わせてもいいと思う。

(2) 「絆の森自然体験案内『ワクワク★ドキドキの自然遊び』」について

当日は、12組家族が参加し、親などの保護者18名、子ども25名（就学前児童6名、小学生17名、不明2名）であった。午前8時30分から開会式を行った後、参加者は絆の森のアスレチック遊びや弓道場射場での制作遊びを自由に始めた（図2）。

絆の森では、高さ3m、長さ10mを超えるネットで作られた遊び場で登り下りをしたり、中には前転や横転をしながら転がり下りるなど、全身を使って遊んでいた。令和4年度は、子どもたちが高い木々の間に張られたスラックラインを歩き渡ることに夢中になっていたことから、令和5年度は絆の森の中を流れる小川の対岸まで渡る遊び場を作ったところ、多くの子どもたちが挑戦していた。中には、みんなでロープを揺らしたり、転落防止のために張ったネットに飛び降りて遊ぶ子どももおり、子ども自身で楽しみながら遊びを発展させていた。その他、ターザンロープやブランコを何度も繰り返して遊ぶ姿や、輪投げや棒倒しでは目標を達成するまで工夫したり、どんぐり転がしでは、木のブロックを使ったり、自然の傾斜を活かして工夫しながら多様なコースを作っている姿が観察された。

弓道場では、準備した端材に木の実をグルーガンで張り付けたり、毛糸や麻紐を巻き付けたりして、キーホルダーを作るなど、親子で制作活動を楽しんでいた。また岡崎森林組合に準備いただいた直径15cm程の丸太をのこぎりで輪切りにするなど、普段ではできない活動を楽しんでいた。

12時10分から、地元の方の指導のもと、参加者は炊いた白米をつぶし棒に巻き付けて、炭火で焼き、「最強汁」^{〔注 4〕}を作って、昼食とした。昼食後、終了（14:00）まで、家族や友達同士、夢中になり遊んでいた。岡崎RACのボランティアスタッフは、始めはどのように関わればよいのか分からない様子も見られたが、アスレチックや木工作に取り組む子どもたちのサポートを通して、子どもや学生との交流を楽しんでいた。

参加した学生は、「この活動を通して遊び環境の大切さを再認識し、実際の保育現場では発達に適した安全な遊び空間を設定していきたい」と振り返りのコメントをしており、よい学修経験であったと思われる。また、参加した子どもや保護者からは、「楽しかった」と感想が寄せられ（表4）、子どもが主体的・積極的に活動する環境について、我々の研究結果を活かすことができたものと思われる。



図2 「ワクワク★ドキドキの自然遊び」当日の様子

- 1 段目 (左) 森のアスレチック全景 (右) ネットクライミングをする様子
- 2 段目 (左) 川の上のロープを渡る様子 (右) 子どもたち自身で遊びを発展させる様子
- 3 段目 (左) 雨樋でコースを作り、どんぐりを転がす様子 (右) 輪を投げて、棒を倒す遊びをする様子
- 4 段目 (左) 自然物を使った制作活動をする様子 (右) 地元ボランティアの方と丸太を切る様子

表4 「わくわく体験★森の遊び場」参加者の感想^[注 ⑤]

- ・アスレチックでずっと遊んでいても飽きなかった。自然体験に参加したい。
- ・自然に囲まれた中で、たくさん遊べてとてもうれしかった。川の上を渡るとき、とてもハラハラドキドキした。
- ・アスレチックのネットクライミングでは、速く登ったり、前転や横転をして下りたりして、楽しむことができた。
- ・外遊びに毎回工夫がされていた。親も工作をかなり真剣に楽しみました（保護者）
- ・アスレチックも工作も家庭ではなかなかできないことなのでありがたい。優しい学生に遊んでいただける機会もそうないので、子どもにとって大きなプラスになっている。（保護者）

4. 考察

(1) 自然活用した遊び環境について

この野外センターの実習で感じたこととして、子どもたちが興味をもつ対象となるものやその条件は色々あるが、その色々を決める要素の一つとしては子ども自身が感じ取れる自分の体力や集中力、持久力による所も大きいことである。

どんぐり転がしコース作りを見ていると、知らない子ども同士でも同じコースの一部ずつを分担して修正・改良する姿が観察された。他人の行動に無関心なのではなく、同じ遊びをする他者との暗黙の分担作業と自己への責任を感じ取っているようであった。そこに周りの大人の「面白いね」「ちょっと一緒に考えてみよう」といった声掛けや、「できたね」「嬉しいね」賞賛が加わることで、子どものコミュニケーション力や協調性などの成長を助長することができることも考えられた。

アスレチックに挑む姿には、恐怖を我慢するのではなく、恐怖に打ち勝つ自分を肯定的に捉え達成感を味わい、困難を乗り越えた満足感を表情に漂わせる子どもが多く観察された。挑戦心とは「怖いけれども頑張ろう」ではなく「怖いからやってみよう」という前向きな意欲を形にする行動のようであった。

昼食時、激しい雨が降り、青シートの下に避難することがあったが、教員が青シートを叩き雨水を落とす姿を見ていた子どもが真似をし始めた。次に青シートから落ちる水の流れを楽しんだ後に、地面にできた水たまりに溝を作り、溜まった水を川のように流す遊びを始めた子どもがいて、どんどん仲間が増えていった。自然の中にいないと生まれない発想の遊びであり、どんどん流れを伸ばす、分流を作る、他の水たまりと結合させより大きな水溜まりを作る、小枝を流したり葉っぱを流す子どもの姿が見られた。これらの行為としては溝を掘るだけの遊びではあるが、どこまでもその遊びは発展できること、体と頭を使って新たなものを作る、自分で楽しみを作り出せる、自然環境を利用した遊びの利点を発見した気持ちになった。目新しいものを指導者が用意するのではなく、子ども自らが新規性を作り出せることも野外の活動として、今後のテーマとして行きたいと考えた。

今回の事業（実践研究）は、親子が対象である。親は子どもが楽しむから、または喜ぶから連れてきたという感覚での参加であったかもしれないが、子どもがアスレチックに挑む姿に心身の成長や運動能力の発達を再発見し、子どもが喜ぶ姿に喜びを感じ、子どもが楽しいと感じる空間と時間を共有することに満足感が持つことになったと思われた。我々は輪投げ遊びを初めて屋外のプログラムに取り入れたが、大人でも、少し距離を伸ばすなどの条件で十分楽しむことができ、子どもと競争することもできる遊びであることを発見し、さらにルールや遊び方を工夫することで、親子参加型の遊びに発展できることも考えられた。

(2) 里山を活性化させる子どもの遊び環境とその継続について

額田地域に限らず、子どもの遊び場となり得る里山は岡崎市内にも多く存在する。また、住宅地域に近くにも手を入れていない自然環境は存在し、それらの地域では、手付かずの里山や自然の活用を願っている。しかし、「里山を活性化させる子どもの遊び環境」がどこでもできないのが現状であり、その理由について「地元」「ボランティア」「大学」それぞれの側から検討してみた。

地元側の理由としては、里山の自然環境があるだけでは遊ぶ環境にはなり得ず、木を伐採する、草を刈るといった労力が必要であるが、その労力が多大である場合には、地元で行う人的・金銭的な余力が十分にあるとは言えない。また、里山の自然環境を利用した遊び環境や、人が集まる環境にするアイデアやノウハウを持ち合わせてないことも考えられる。さらに、他の地域から不特定多数の人間が地元に入ることによる環境悪化や汚染に対する懸念があるだろう。

人的資源であるボランティア側の理由として、本学にもボランティアサークルがあり、岡崎市内の各地域にもボランティア団体が存在する。しかし、ボランティアは自発的な意志に基づき他人や社会に貢献する行為であることから、今回のような自然環境での活動をサポートして欲しいという依頼をしても、各個人の目的意識の統一をすることは難しいこともあるだろう。さらに、平日には通学や通勤をしているケースが多く、土日祭日などの休日にボランティア活動は限定されるが、人によっては事情も大きく異なることもある。

産官学連携の1つを担う大学側の理由として、特に教育・保育に特化した本学としては、自然環境下における教育・保育を考えた場合には、豊かな人間性、自らの行動で得られる知識の提供（自立性）、そこから生まれる自己肯定感など、自ら考える力と生きる力の基盤づくりとなる有効な教育内容と考えられ、机上で教える「知」の統合と実践への応用といった高い教育的意義のある内容であり、教育課程に取り入れる意義は大きいと考える。しかし、学外の活動であり、授業の一環としての計画を立てにくいというえ、参加学生への安全確保への認識、野外活動の技術指導などに時間を要することが問題となる。また、地権者の理解を得たうえで利用できる環境を探すことや、対象となる子どもを集めることが困難を感じる。さらに、本来は一授業一教員が原則であるが、野外実習ともなれば、1人の教員だけでは不可能であろう。

以上が、「里山を活性化させる子どもの遊び環境」がどこでもできないのが現状であるが、本調査で知られたこととして、大学が地元やボランティアとの連携が組まれることで、また連携が密となるよう、堅実な企画運営、連絡を取り合い計画的に進めることで、「里山を活性化させる子どもの遊び環境」を作り、継続することができることが考えられた。

5. まとめ

草刈りやチェーンソーを使って伐採をしたり、遊び場を作ることについて、地元の人材の育成をしながら、将来的には、低額の参加費を徴収し他の地域の人間を募って、実施することも考えている。地元の人間でなければ、伐採や草刈りを経験することはなく、他の地域の人間にとって里山・里川の保全・維持・管理について体験型の自然学習の一環となるものと考えている。この取り組みは親子にとって貴重な経験になるうえ、作業に関する人的・金銭的課題をクリアでき、地元の飲食店の利にもつながる、まさに三方良しの構造を形成できるだろう。

現在、里山こうぼうをつくる会が実施している自然遊びや自転車体験になどの活動に、他の地域の人が参加しており、額田地域を気に入って、「住みたい」と思う人が増えており、令和6年度も2軒の移住の予定があると伺った。また、額田地域に移住し農業を営んでいる人の

中から、SNS 活用の講座や web を使った情報発信の仕方を学ぶ機会を設けるなど、知識や技術といった知的財産を活用することも計画されている。

里山の生活や田舎の古民家暮らしなどが TV で紹介されたり、ダイレクトメールなどによる勧誘も見られるが、実体験がない人間には理解できない点が多い。今回のような親子での活動遊びに参加し、里山の状況や現住居との距離感を理解し、今後さらに、民泊や里山モデル住宅による宿泊経験などに発展することができれば、里山こうぼうをつくる会の村おこしとしての本来の目的が実現する可能性も考えられた。

自然における子どもの遊び環境を作り出すことに対して、地元の協力やボランティアの協力、あるいは野外施設の運営との共催などにより、物質的要素とマンパワーが得られることが示された。産学官連携が地方のさまざまな開発や復興に必要とされるが、「産」となる地元の企業や団体による場所とその場所ならではの物的提供、「官」である市からの補助金の提供と広報、「学」である大学等の子ども指導の専門職による企画など、それぞれの役割が円滑に連携することで比較的容易に、里山を活性化させる子どもの遊び環境が継続できる可能性が示された。

最後に、本研究では、額田地域を中心とした里山に少し手を加えることで子育て世代にとって好まれる憩いの場、子どもとの遊びの場、自然観察など学びの場となり得ることを示した。また、岡崎市には、おおだの森、岡崎市ホテル学校、おかざき自然体験の森など多くの自然学習施設がある。これらを含め、子育て支援政策の一環として、岡崎市が一大自然体験公園化事業を図ってはどうか。市街地からくらがり溪谷につながる県道 37 号線を「こども自然未来公園」と称し、点在する野外公園や自然学習施設を子育て環境の視点で有機的に連携させ、十分な広報を行い、さらに里山を市民参加型、地元住民との交流型の子どもの遊び環境とすることで、観光と地域活性化にも貢献できると考えている。このような街にも、自然にも近い子育て環境は、若者の定住にもつながることは大いに期待できるだろう。これが大きな夢で終わることがないように働きかけていきたい。

注

- (1) 愛知県野外教育センターは指定管理者認定特定非営利活動法人愛知ネットによって管理運営がされている。
- (2) 愛知県環境部「あいち森と緑づくり環境活動・学習推進事業交付金」
- (3) ロータリークラブとは、友好と奉仕を志す職業を異にする成人で形成され、各地域で活動を展開する団体。
- (4) 岡崎市ぬかたブランド協議会が発案した市産の食材（鶏肉や米）で作られた鍋料理。
- (5) 引用した参加者の感想や、学生の振り返りコメントは文意が変わらないように、集約したり、語尾などを修正したりしている。

引用文献

- 1) 米窪洋介、山下晋、渡部努、町田由徳、小原倫子「冒険遊び場（プレイパーク）の調査報告～本学における『冒険遊び場』実施へ向けての調査～」『子ども好適空間研究第 1 号』岡崎女子大学・岡崎女子短期大学、2019、pp. 80-87
- 2) 山下晋、米窪洋介、渡部努、町田由徳、小原倫子「『オカタン★冬の冒険遊び場』実践報告～子どもの夢中度分析から屋外の子どもの好適空間のあり方を探る～」『子ども好適空間研究第 1 号』岡崎女子大学・岡崎女子短期大学、2019、pp. 73-79
- 3) 渡部努、山下晋、米窪洋介、町田由徳、小原倫子「屋外遊びにおける安全配慮のあり方～オ

- カタン★夏の冒険遊び場より～』『子ども好適空間研究第2号』岡崎女子大学・岡崎女子短期大学、2020、pp. 45-52
- 4) 米窪洋介、渡部努、山下晋、町田由徳、小原倫子 (2020) 『『危ないからダメ』を言わないことへのチャレンジ～オカタン★秋の冒険遊び場より～』『子ども好適空間研究第2号』岡崎女子大学・岡崎女子短期大学、2020、pp. 53-61
- 5) 山下晋、渡部努、春日規克 (2022) 「子どもの意欲を育む屋外遊び環境の調査と実践研究」『子ども好適空間研究第4号』岡崎女子大学・岡崎女子短期大学、2022、pp. 49-56
- 6) 山下晋、春日規克 (2023) 「子どもの発想を高める遊具・素材の検討」『子ども好適空間研究第5号』岡崎女子大学・岡崎女子短期大学、2023、pp. 22-30
- 7) 山下晋 (2023) 「額田地域の森林を活用した屋外遊びの有効性」『地域活性化研究』、岡崎大学懇話会第22号、pp. 27-36

謝辞

本研究は岡崎大学懇話会の令和5年度産官学共同研究助成を受けて行った。また、愛知県野外教育センター、石原林道協議会（里山こうぼうをつくる会）、岡崎ローターアクトクラブの皆様には事業実施に際し、多大なご協力をいただいた。この場を借りて深く御礼申し上げます。